漱石の漢詩

―― 平仄式の検証 ――

松尾善弘

はじめに

近年、漱石の漢詩の研究書・解説書が相次いでいる。しかし、一瞥したところ、それらの諸本は漢詩の神髄である音的側面すなわち「平仄」に着目して、漱石漢詩の真価を問うたものはないようだ。

中国文人も賛嘆してやまない漱石漢詩のすばらしさは平仄式の検証を抜きにしては語れない。漱石が実作に当たって、平仄・押韻・語義・語法の整合性を求めていかに腐心したか、全作品を網羅して点検することによってその呻吟する姿に肉迫してみたい。同時に誤字誤植のいくつかを指摘し訂正すると共に正訳をめざそうと思う。

漱石の漢詩（全208首）を初句の平仄型により類別すると次表のようになる。尚、『漱石全集』第十八巻（岩波書店　1995）を底本とする。（詩題の数字はその訳注番号）

初句平仄型	五絶	五律	小計	七絶	七律	小計	五古	七古	小計
＜平起り平終り＞	0	1	1	23	36	59	10	3	13
＜平起り仄終り＞	17	4	21	0	0	0			
＜仄起り平終り＞	2	5	7	22	45	67			
＜仄起り仄終り＞	34	2	36	3	1	4			
合計	(53)	(12)	65	(48)	(82)	130	(10)	(3)	208

近体詩作品の平仄式は五言詩では＜平－仄／仄－仄＞が正格、＜平－平／仄－平＞が偏格。七言詩ではそれぞれその逆であることが漱石の作品結果数からも一目瞭然である。

平声字を「○」印、仄声字を「●」印で表し、基本平仄型を図式化すると以下の通りとなる。

＜平仄型＞	五言句	七言句
＜平－平＞型〔A〕	○○・●●○	○○・●●・●○○
＜平－仄＞型〔B〕	○○・○●●	○○・●●・○○●
＜仄－平＞型〔C〕	●●・●○○	●●・○○・●●○
＜仄－仄＞型〔D〕	●●・○○●	●●・○○・○●●

五・七言絶句の平仄式は、偶数句平声字押韻の条件を加えて以下の通りとなる。

＜平－平＞式＝〔ＡＣＤＡ〕　　＜仄－平＞式＝〔ＣＡＢＣ〕

＜平－仄＞式＝〔ＢＣＤＡ〕　　＜仄－仄＞式＝〔ＤＡＢＣ〕

五・七言律詩の平仄式は、初句が＜平－平／仄－平＞型のものの第５句を＜平－仄／仄－平＞に変えて、あとは前半４句のくり返しで作ればよい。

平仄の最小単位がなぜ「○○」「●●」であるのか考えてみる。

（１）孤立語という言語学的特徴を持つ漢語を表記する漢字は、一字が一形一音一義を有し原則として一ワードとなる。母音の優勢な単音節語で、定式化すると〔Ｓ＝ＣＭＶＥ／Ｔ〕となる。四種（中古音は八種）の声調（Tone）を持つ声調言語であることを最大の特徴とする。高めで平らに発音する陰平声（現代漢語の第一声）と尻上がりに発音する陽平声（同第二声）が「平○」で、いずれも朗読にあたって長く引いて発声するのに優れる。ナベ底型に発音する上声（同第三声）と急激に尻下がりに発音する去声（同第四声）、それに語尾に－ｐ・－ｔ・－ｋ（日本語漢字音で－フ・－ツ・－ク・－チ・－キとなる）を持っていたと思われる入声音を合わせ、いずれもクセのある発音という音味で「仄●」。最小二単位を、もし両者を混用して「●○」「○●」と設定するならば、あまりに複雑すぎて定式化できないであろう。

（２）漢語は最少２字で単語として意味を持つ最小語構成単位となる。因みに一句残りの３字は「○○●／●●○／○●●／●○○」の四型のいずれかとなる。語構造上は「２・１／１・２／１・１・１／３」字のいずれかとなる。

（３）漢詩という韻文作品の根幹となる韻律。漢字２字が一拍となりリズムを荷う。＜平－平＞七言なら「トントン・ドンドン・ドントントン ｸ」

以上の四基本型に［二四六分明＝二四不同二六対］の規則と［一三五不論］の許可条件をつけて「タガ」をはめる。更に［反法］［粘法］［救拯法］及び［平声押韻］の諸規則を踏まえて、詩人達は苦労しながら実作に取り組んだわけである。

１　初句＜平－平＞型五律作品例

〔38〕 函山雑咏（其三）

	＜平仄式＞	＜基本平仄式＞
１来相峰勢雄	○○○●◎	○○●●◎〔Ａ〕
２恰似上蒼穹	●●●○◎	●●●○◎〔Ｃ〕
３落日千山外	●●○○●	●●○○●〔Ｄ〕
４号風万壑中	○○●●◎	○○●●◎〔Ａ〕
５馬陘逢水絶	●○○●●	○○○●●〔Ｂ〕

6 鳥路入天通　●●●○◎　●●●○◎〔C〕
7 決眥西方望　●●○○●　●●○○●〔D〕
8 玲瓏岳雪紅　○○●●◎　○○●●◎〔A〕

詩形は近体詩の五言律詩。初句＜平－平＞型〔A〕であるから句末の雄 xióng が近体詩の〔平声押韻〕の規則に従い、穹 qióng・中 zhōng・通 tōng・紅 hóng と共に上平一東 dōng で押韻。2句目は〔反法〕により＜仄－平＞〔C〕、3句目は〔粘法〕により＜仄－仄＞〔D〕。4句目〔反法〕により＜平－平＞〔A〕、5句目は〔粘法〕だが句末を仄字にしなければならないので＜平－仄＞〔B〕。つまり〔粘法〕は「頭粘尾不粘（頭はくっつくが尻尾はくっつかない）」のである。以上で基本四型がすべて出揃う。

1句3字目と5句1字目が〔一三五不論〕を使い平仄を逆にしているが〔救拯〕の手を打っていないため初句は軽い〔孤仄〕の禁を犯している。しかし、全句の平仄数は「平20：仄20」に戻っている。

4句1字目の「号」は通常は去声の号 hào 韻だが、この場合は2字目が〔孤平〕になるのを防ぎ陽平豪 háo の韻で読むべきである[1]。

3・4句は、落日／号風、千山外／万壑中が対語になり、〔S－N（名詞述語構造）〕の対句。5・6句も、馬陘／鳥路、逢／入、水／天、絶／通がそれぞれきれいな対語になり、〔S－V－O－V（連動式構造）〕の見事な対句になっている。

2　初句＜平－仄＞型五絶作品例

〔7〕即時（其一）

	＜平仄式＞	＜基本平仄式＞
1 雨晴雲亦散	●○○●●	○○○●●〔B〕
2 夕照落漁湾	●●●○◎	●●●○◎〔C〕
3 誰道秋江浅	○●○○●	●●○○●〔D〕
4 影長万丈山	●○●●◎	○○●●◎〔A〕

湾 wān・山 shān が上平十五刪 shān の韻。初句1字目、基本型「平」を「仄」に変えたまま〔救拯〕の手を打っていない。尤も、4字目の「仄」を「平」に変えることは絶対に出来ないし（〔二四不同〕の原則を犯す）、5字目も変えられない。そこで相殺して平仄数を元に戻すには、3・4句と同じように2句1字目を逆にして、2句にわたる〔救拯〕の手を打たねばならなかったわけだ。

さて、本詩は初句１字目のみが基本型に悖り、平仄数も「平９：仄１１」とひずんでいる。しかし、このように基本型に１字のみ違背する作り方は近体詩作品中にはよく見られる現象である。恐らく基本平仄式に完全に一致することを嫌った結果であろう。筆者はこれを「一瑕疵完成美」作品と呼ぶことにしている。

詩題の「即時」は訳注者の言う通り、「即事」の誤りであろう。漱石の詩文類には時としてかかる不用意な「当て字」が見られるようだ。

３－１　初句＜仄－平＞五絶作品例

〔32〕無題

	＜平仄式＞	＜基本平仄式＞
１抱剣聴龍鳴	●●●○◎	●●●○◎〔C〕
２読書罵儒生	●○●○◎	○○●●◎〔A〕
３如今空高逸	○○○●●	○○○●●〔B〕
４入夢美人声	●●●○◎	●●●○◎〔C〕

近体詩の〔平声押韻〕の規則により初句末の鳴 míng も生 shēng、声 shēng と共に下平八庚 gēng で押韻している。

初句３字目「聴 tìng」は去声径 jìng の韻。もしこれを陰平声青 qīng 韻に読めば〔下三平〕の大禁を犯すことになる。同じく３句４字目も通常は「高 gāo」だが、この場合〔二四不同〕の大原則を守り去声号の韻で読む（居号切 gào）。すると１・３・４句は基本型通りだが、２句が〔孤平〕の禁を犯すと共に４字目も「二四同」になる不首尾を招いている。

作品〔184〕によると「儒 rú」はちゃんと２声（陽平声）で読んでいる。

非耶非仏又非儒 rú　○○○●●○◎

窮巷売文聊自娯 wú　○●●○○●◎

作品〔31〕の４句目が「欲罵古人対古書」となっており、連作している間に「古人」の「古gǔ」と「儒生」の「儒 rú」の声調を錯覚してしまったのかも知れない(筆者にもその覚えがある)。

詩文類で時おり見せる漱石の不用意な「当て字」の一種と見なす方が妥当であろうが、数少ない乱調の一首である。

本論文の後半で、我われはもう一つ「求」字の乱用で翻弄されることになる。

3－2　初句<仄－平>型五絶作品例

〔205〕(詩題省略)

	<平仄式>	<基本平仄式>	
1 君臥一円中	○●●○○	●●●○○	〔C〕
2 吾描松下石	○○○●◉	○○○●◉	〔B〕
3 勿言不会禅	●○●●○	○○●●○	〔A〕
4 元是山林客	○●○○◉	●●○○◉	〔D〕

近体詩の作法は〔平声字押韻〕が原則だが、本詩はその裏返しとも言うべき「仄声字押韻」の作品である。五言詩の初句<平－平>型、<仄－平>型は「偏格」で作品数も少ないが、オーソドックスな「正格」作品を「陽」とすれば、詩想も「陰」の様相を呈した宗教色の濃い内容と言えないだろうか。漱石の陰陽観・明暗観が伺えるような気がする。

石 shí（日本漢字音セキ）・客 kè（キャク）が入声十一陌 mò（バク）での押韻。3・4句の1字目の平仄をそれぞれ逆にして二句にわたる「救拯」。従ってこの詩も初句1字目のみが基本平仄式に悖るいわゆる「一瑕疵完成美」作品である。

4　初句<仄－仄>型五絶作品例

〔8〕即時（其二）

	<平仄式>	<基本平仄式>	
1 満岸蘋花白	●●○○●	<仄－仄>	〔D〕
2 青山影欲流	○○●●◎	<平－平>	〔A〕
3 漁翁生計好	○○○●●	<平－仄>	〔B〕
4 画裡掉軽舟	●●●○◎	<仄－平>	〔C〕

五言詩初句<仄－仄>型は、1・2句（隣り合う奇・偶数句）が〔反法〕、2・3句（隣り合う偶・奇数句）が〔粘(ねん)法〕、それに偶数句末〔平声字押韻〕を満足させて基本平仄四型が全部使われる。本詩はその四型に一字の違背もない完璧な作品に仕上がっている。流 liú・舟 zhōu が下平十一尤 yóu の韻。

5　初句＜平ー平＞型七律作品例

〔3〕題画

	＜平仄式＞	＜基本平仄式＞	
1 何人鎮日掩柴扃	○○●●●○◎	○○●●●○◎	〔A〕
2 也是乾坤一草亭	●●○○●●◎	●●○○●●◎	〔C〕
3 村静牧童翻野笛	○●●○○●●	●●○○○●●	〔D〕
4 簷虚闘雀蹴金鈴	○○●●●○◎	○○●●●○◎	〔A〕
5 溪南秀竹雲垂地	○○●●○○●	○○●●○○●	〔B〕
6 林後老槐風満庭	○●●○○●◎	●●○○●●◎	〔C〕
7 春去夏来無好興	○●●○○●●	●●○○○●●	〔D〕
8 夢魂回処気冷冷	●○○●●●●	○○●●●○◎	〔A〕

七言詩の基本平仄式四型は必然的に〔二四不同二六対〕になっている。2字・2字・3字と切りリズムをとる。隣り合う奇・偶数句が〔反法〕、隣り合う偶・奇数句が〔粘法〕に従う。更に偶数句末が平声字押韻で一韻到底。本詩は初句末も平声字だから当然押韻させねばならない。逆に初句を除く奇数句末は必ず仄声字にしなければならないわけだ。

1・2・4・5句は基本型通り。3・6・7・8句は〔一三五不論〕を使って1・3字目を逆にし、一句内で〔救拯〕している。6句は1・3字目を逆にして〔救拯〕した結果、4字目が〔孤平〕になるのを防ぎ5字目を平字に変えた。ために5・6句の平仄数は「平8：仄6」。全句の平仄数も「平29：仄27」となった。基本四型を全て使い、諸規則を有効に駆使した完璧な近体詩作品に仕上げられている。

3・4句は、村・静／簷・虚（形容詞述語構造）と牧童・翻・野笛／闘雀・蹴・金鈴（S－V－O構造）との合成句で、見事な対句となっている。――画かれた村は静寂そのもので、恰も牧童が吹き鳴らす笛の音が聞こえてくるかのようである。何も描かれていない軒下からは、恰も戯れる雀どもが金の鈴を蹴とばすような鳴き声をたてているのが聞こえてくるかのようだ。漱石の特異な音感覚が遺憾なく発揮された奇句となっている。因みに「虚・静」は道家思想の象徴的術語でもある。

5・6句も、溪南・秀竹／林後・老槐（名詞連語又は名詞述語構造とみてもよい）と雲・垂・地／風・満・庭（S－V－O構造）との合成句で、語音（平仄）・語義（品詞）・語法の対を全て満足させた見事な対句になっている。

さて、本詩は扃jiōng・亭 tíng・鈴 líng・庭 tíng が下平声九青 qīng の韻を踏んでおり、句末字

の「冷 lěng（魯朾切）」は上声二十三梗 gěng の韻だから、「冷líng（郎丁切）下平声九青の韻」の間違いであろう。「冷」には郎丁切 líng の語音もあるが、次詩に見るように他の箇所ではすべて lěng で用いている。

〔4〕　又憐今夜刀川客　●○○●○○●
　　夢冷篷窓聴雨眠　●●○○●●◎
〔151〕　空山有影梅花冷　○○●●○○●
　　春澗無風薬草深　○●○○●●◎
〔189〕　冷上孤幃三寸月　●●○○○●●
　　暖憐虚室一分灰　●○○●●○◎

恐らく編集子が「冫(ニスイ)」と「氵（サンズイ)」を誤写したものであろう。

但し、問題は押韻字の誤植の指摘に終わらせられないことだ。句末の２字「冷冷」を「泠泠」に正すことによって解釈にも微妙な違いが出てくるのである。

いま『大漢和辞典』で両項目の解説を引いてみよう。

〔冷冷〕１．清く涼しいさま。２．水の音のすがすがしいさま。３．風の音の清らかなさま。４．音声の清く盛におこるさま。

〔泠泠〕１．水の音の形容。２．あまだれの音の形容。３．風の音の形容。４．音声の盛なさま。５．清らかに涼しいさま。６．心中の清いさま。

両語の解説はほぼ同一内容だが、後者の６がニュアンスの異なる解説になっている。

更に『漢字源』で調べると、これも両語の解説はほぼ同じであるが、〔泠然〕の解説②に、「行動がかろやかなさま」と出ている。(2)

つまり、両語は身の回りの自然の気候が清く涼しいこと、周囲で起こる自然の音声が涼しげに鳴り響くという二点では同一である。だが、後者には「人間の精神面で起こる清清しい変化」の意味が備っているようである。そこで、以下この語義を加味しつつ７・８句を解釈してみよう。

７　春去りて夏来たれども好興なし
８　夢魂回る処　気泠泠たり

――いつの間にか春が過ぎ夏になったが、格別これといった面白いことがあるわけではない。だが、この画を観賞してふと我に返ってみると、何となく清清しい気分を取り戻した自分に気がついたことだ。

漱石は恐らく一幅の山水画を観賞してこの「題画」をものしたのであろう。かねてなんの興趣の湧くこととてない平凡な日常生活の中で、この画を観たあと気分転換になったことについて、謝意を込めて賛辞を呈したのではないだろうか。

6　初句<仄ー平>型七律作品例

〔74〕無題

	<平仄式>	<基本平仄式>	
1 生死因縁無了期	○●○○○●◎	●●○○●●◎	〔C〕
2 色相世界現狂痴	●○●●●○◎	○○●●●○◎	〔A〕
3 迍邅履校塵中滞	○○●●○○●	○○●●○○●	〔B〕
4 迢遞正冠天外之	○●●○○●◎	●●○○●●◎	〔C〕
5 得失忘懐当是仏	●●○○○●●	●●○○○●●	〔D〕
6 江山満目悉吾师	○○●●●○◎	○○●●●○◎	〔A〕
7 前程浩蕩八千里	○○●●●○●	○○●●○○●	〔B〕
8 欲学葛藤文字技	●●●○○●●	●●○○●●◎	〔C〕

1・2句は1字目をそれぞれ逆にして二句にわたる〔救拯〕。但し、1句5字目を「平」にしたため軽い〔孤仄〕の禁を犯した。4句1・3字目は同一句での〔救拯〕。5字目を「平」にして4字目の〔孤平〕を避けた。7句5字目が「仄」になり6字目を〔孤平〕にしてしまった。

8句は3・5字目を逆にして〔救拯〕すると同時に4字目が〔孤平〕になるのを救っている。

本詩は、期 gī・痴 chí・之 zhī・师shī が上平声四支 zhī の韻を踏んでいる。8句末の「技 jì」は去声四寘 zhì の韻だから、ここは明らかに「枝 zhī（上平声四支）」の間違いである。以下の数首の用語例がそのことを証明してくれる。

〔13〕七絶作品

長堤尽処又長堤　○○●●●○◎

桜柳枝連桜柳枝　○●○○○●◎　　上平声八斉 gí の堤 dī との通押。

〔39〕五律作品

一夜征人夢　●●○○●

無端落柳枝　○○●●◎　　湄 méi、詩 shī、遅 chí と共に上平声四支の韻。

〔91〕五古作品

廓廖天尚在　●○○●●　　時 shí、之 zhī、知 zhī、悲 bēi、衰 shuāi、遅 chí

高樹独余枝　○●●○◎　　と共に上平声四支の韻。

この外の四例を省略。

一方、「技」の用語例も次の通りである。

〔105〕五絶作品

却愧丹青技　●●○○●

春風描不成　○○○●◎

以上、8句末が「枝」になることが明白となった。すると8句は「学ばんと欲す　葛藤文字の枝」となり、つたかずらの如くもつれた英文や漢詩文の文字の枝々を今後ともはるばる学び究めて行きたいものだと解釈できる。漱石の感懐に一歩でも近付く解釈になれば幸いである。

3・4句は、迍邅／迢遞（副詞的修飾語＝状語）、屨・校／正・冠（V＋O）、塵中・滞／天外・之（O＋V；押韻の関係で転倒）の句構造で見事な対句に作ってある。

5・6句も、得失・忘懐／江山・満目（四字連語で一句の主語となる）、当（助動詞）／悉（形容詞的修飾語＝定語）、是（判断詞）・仏（名詞）／吾师（名詞）と後半やや錯綜するが基本的には［名詞述語構造句］になっている。

ともに、語音（平仄）・語義・語法を対にするという対句三条件を満足させた見事な対句に作られている。

7－1　初句<仄－仄>型七絶作品例

〔2〕鴻台（其二）

	<平仄式>	<基本平仄式>	
1 高刹聳天無一物	○●●○○●◉	●●○○○●◉	〔D〕
2 伽藍半破長松鬱	○○●●○○◉	○○●●○○◉	〔B〕
3 当年遺跡有誰探	○○●●●○○	○○●●●○○	〔A〕
4 蛛網何心床古仏	○●○○○●◉	●●○○○●◉	〔D〕

初句<平－平>型正格作品を七言詩の「陽」とすれば、<仄－平>型偏格作品はいわばその裏返しの「陰」である。本詩は初句末の仄声字をそのまゝ協韻させた仄声字での押韻。物 nù ブツ・鬱 yù ウツ・仏 fó ブツ・が入声五物の韻。

1句の1字目と3字目を逆にして〔救拯〕。2句は〔反法〕により<平－仄>。3句は〔粘法〕に従い<平－平>で句末は平声字となる。4句は〔反法〕により<仄－仄>。4句1字目のみが基本型に違背した所謂「一瑕疵完成美」作品である。

7－2　初句<仄－仄>型七律作品例

〔157〕無題

	<平仄式>	<基本平仄式>	
1 絶好文章天地大	●●○○○●●	●●○○○●●	〔D〕
2 四時寒暑不曽違	●○○●●○◎	○○●●●○◎	〔A〕
3 夭夭正昼桃将発	○○●●○○●	○○●●○○●	〔B〕
4 歴歴晴空鶴始飛	●●○○●●◎	●●○○●●◎	〔C〕
5 日月高懸何磊落	●●○○○●●	●●○○○●●	〔D〕
6 陰陽黙照是霊威	○○●●●○◎	○○●●●○◎	〔A〕
7 勿令碧眼知消息	●○●●○○●	○○●●○○●	〔B〕
8 欲弄言辞堕俗機	●●○○●●◎	●●○○●●◎	〔C〕

初句<仄－仄>型は基本四平仄型を全て使う平仄式になる。偶数句末の平声字がそのまゝ協韻。違 wéi・飛 fēi・威 wēi・機 jī が上平声五微 wēi の韻。２句１・３字目を逆にして〔救拯〕。あとは全て基本型通りで、７句１字目のみが違背した「一瑕疵完成美」作品である。「平27：仄29」。

３・４句は、夭夭／歴歴（定語）、正昼（時間詞）／晴空（場所詞）、桃／鶴（主語）、将／始（状語）、発／飛（動詞）の〔動詞述語構造句〕。

５・６句は、〔日月／陰陽（小主語）、高・懸／黙・照（副詞・動詞）の動詞述語構造〕が大主語で、何（助詞）／是（判断詞）、磊落／霊威（名詞）が述語になった［名詞述語構造］のきれいな対句に仕上げられている。

8　五言古詩作品例

〔66〕（失題）

1 吾心若有苦	○○●●●
2 求之遂難求	○○●○○
3 俯仰天地際	●●○●●
4 胡為発哀声	○○●○◎
5 春花幾開落	○○●○●
6 世事幾迭更	●●●●◎
7 烏兎促鬢髪	○●●●●
8 意気軽功名	●●○○◎

9 昨夜正月暈　●●○●●
10飆風朝満城　○○○●◎
11夢醒枕上聴　●●●●●
12孤剣画底鳴　○●●●◎
13慨然振衣起　●○●○●
14登楼望前程　○○●○◎
15前程望不見　○○●●●
16漠漠愁雲横　●●○○◎

近体詩では五七言を問わず「平仄」が最重要観念となることは前節までに見てきた通りである。詩人達が押韻を初めとする各種「平仄」の規則に合わせて自己の詩想を形にする上でどれほど呻吟したか察するに余りあるものがある。

その点、古詩作品はそれら多くの規則に縛られることなく、偶数句末の押韻法の制約を受けるだけで、かなり自由な詩作ができた。そのため、例えば対句などは近体詩作品よりむしろ古体詩作品の方がリズミカルで見た目にもきれいな作りになっているものが多いと言える。

とは言え、『詩経』以来、「押韻」だけは作詩上の必須条件である。「押韻」していない漢詩は漢詩ではなく、ただの漢字ならべ詩なのである。(3)

本詩は 4 句末以降に、声 shēng・更 gēng・名 míng・城 chéng・鳴 míng・程 chéng・横 héng の下平声八庚 gēng の韻が踏ませてあるが、2 句末のみは下平声十一尤 yóu 韻の求 qiú になっている。これを漱石独特の「ズッコケ」とみなせばそれまでだが、一応整合性ある正当な字を求めてみる価値はあるだろう。

訳注では、「従来の全集、和装本『漱石全集』いずれも 2 句の「求」2 字を、ともに『相』に誤る」と言う。しかし「相」を xiàng（去声二十三漾）ではなく、xiāng（下平声七陽の韻）と考えれば下平声八庚との通押として十分成り立つのである。(4) 平仄の整合性が優先するわけだ。

吾心若有苦　相之遂難相

――自分の心には何やら苦しみがある（このところ鬱の状態である）。その根源を診断してみようと思うのだが、結局診断することも難しい。

又、この「求」字は〔173〕でも「成 chéng（下平声八庚）字」の誤りではないかとされる。

長舌談禅無所得　○●○○○●●
禿頭売道欲何求／〔成〕　●○●●●○○／〔◎〕

この七律詩は、横 héng・生 shēng・明 míng・清 gīng が下平声八庚で押韻させてあるわけだから、明らかに「成」字でなければならない。

そもそも「求」は押韻字として使うならば〔139〕〔148〕七律詩のように、悠 yōu・愁 chóu・

流 liú・留 liú・憂 yōu・由 yóu・謀 móu・丘 qiū・秋 qiū などと協韻させねばならないわけだ。ところが他の詩で拾ってみると全て句中で普通に「求める」の字として用いられている。

〔49〕 非是求名滞帝城 ○●○○●●◎
唯憐病羸帰思生 ○○●●●○◎

〔140〕 薫蕕臭裡求何物 ○○●●○○●
蝴蝶夢中寄此生 ○●●○●●◎

〔177〕 欲求蕭散口須緘 ●○○●●○◎
為愛曠夷脱旧衫 ●●○○●●◎

〔207〕 大愚難到志難成 ●○○●●○◎
五十番秋瞬息程 ●●○○●●◎
観道無言只入静 ●●○○○●●
拈詩有句独求清 ○○●●●○◎

おもしろいことに「求」字を織り込んだ詩は下平声八庚の韻を踏むものが多い。時に「下手の八庚」と揶揄されるほどの韻目だが、漱石の好きな韻目であったようだ。

〔173〕の「何求」→「何成」と〔207〕の初句の「難成」を合せ考えると、本詩2句の「求」はほぼ「成」の誤植と言ってよいだろう。

成之遂難成 ○○●○◎

――私の心には名状しがたい苦悩がある。その根源をつきとめて形あるものにしたいと思うのだが、結局そうすることは出来ないでいる。

この句の内容自体、漱石が心の煩悶を把握できないもどかしさを描写したものであるから皮肉である。「相」にしろ「成」にしろ、はからずも漱石自身の心の揺れを詩形式上でも露呈する結果となっている。

9 拗(おう)体作品例

〔11〕〔『七草集』評より〕(其三)

	＜平仄式＞	＜基本平仄式＞	
1 江東避俗養天真	○○●●●○◎	○○●●●○◎	〔A〕
2 一代風流銭逝春	●●○○●●◎	●●○○●●◎	〔C〕
3 誰知今日惜花客	○○●●●○●	●●○○○●●	〔D〕
4 却是当年剣舞人	●●○○●●◎	○○●●●○◎	〔A〕

完璧な平仄式の詩を作り続けた漱石であるが、一例のみ拗体作品があった。初句＜平－平＞型

七絶作品で、真 zhēn・春 chūn・人 rén が上平声十一真の韻。初句と2句は基本平仄式通りだが、2句と3句が「失粘(しってん)」を犯す。3句は<仄ー仄>型〔D〕、4句は<平ー平>型〔A〕に作るべきであった。但し、この程度の拗体作品は中国の唐詩中でも時たま見受けるものである。

10　七言古詩作品例

〔24〕〔『木屑録』より〕(其七)

<平仄式>

1 鋸山如鋸碧崔嵬　●○○●●○◎
2 上有伽藍倚曲隈　●●○○●●◎
3 山僧日高猶未起　○○●○○●●
4 落葉不掃白雲堆　●●●●●○◎
5 吾是北来帝京客　○●●○●○◎
6 登臨此日懐往昔　○○●●○●◎
7 咨嗟一千五百年　○○●○●●○
8 十二僧院空無迹　●●○●○○◎
9 只有古仏坐磅礴　●●●●●○◎
10雨蝕苔蒸閲桑滄　●●○○●○◎
11似嗤浮世栄枯事　●○○●○○●
12冷眼下瞰太平洋　●●●●●○◎

古詩形式は平仄上押韻のみが作詩条件であり、しかも換韻が許される。その分、詩人の思いのたけを自由奔放に表現するのに勝れる。

漱石は『木屑録』(十三)の「余、房の地を相(み)て、之を三分す。」に始まる文章で、峨峨たる鋸山の山容をやや難解な漢語を駆使して描写している。本詩はその内容通り、実は詩形上も4句ひとまとまりの三連が、「陽」(嵬 guī・隈 wēi・堆 duī が上平声十灰 huī の韻〕→「陰」(客 kè キャク・昔 xī セキ・迹 jì セキが入声十一陌 mò バクの韻)→「陽」(磄 táng・滄 cāng・洋 yáng が下平声七陽 yáng の韻)と山なみの変容そのままを擬して描写しているようなのだ。漱石の作詩の際の「余裕」の一端を垣間見る思いがする。

訳注によれば、正岡子規は3・4句に傍点を施し「不掃作満地如何(「掃わず」は「地に満つ」に作っては如何)」と言っているそうだ。我われはこの一文から次の二点を看取することができる。

〔1〕「落葉不掃」は和臭漢文であること。平仄の規則に左右されない本詩においては「不(否

定副詞)・掃（動詞)・落葉（目的語)」が正文である。

〔2〕「落葉」を先に言うなら、子規の「落葉（主語)・満（動詞)・地（目的語)」が正文。

漱石を「天稟の才あり」と絶賛する子規だが、子規こそ「天賦の才」を備え確かな漢語力を持っていたことを伺わせる傍注となっている。

おわりに

近体詩は声調言語という特色を持つ漢語の表記道具である漢字の平仄（平上去入）を中核とした押韻や平仄式及びそれに伴う諸規則を踏まえ、更にいくつかの禁忌事項を念頭において周到・綿密に作られた韻文作品である。

中国文人も瞠目する漱石の漢詩が、その様式に倣って作られている以上、その作品はそれら諸規則と照合し検証してこそ全体としてのすばらしさを確認し鑑賞することが出来ると言えよう。

漱石が単に漢字の表層的な意味だけでなく、その生命とも言える漢字音の知識も並はずれて豊富であったこと、近体詩の諸規則に精通していたことが本論文で証明できたと思う。

最後に近体詩を始めとする唐詩の読解の際、平仄式による検証がどれほどの威力を持つかまとめておこう。

1．押韻字の判定はもとより、誤字・当て字・異字の判定に役立つ。

2．異読ある漢字の字義と字音（声調）の判定に役立つ。

3．対句の三条件の一つとして、語音の対の確認と語釈との整合性に資することができる。

4．そうして何よりも、作品中の諸規則に反する用字の多寡によって、詩人の上手下手が判定できることである。

これまで語音軽視の傾向にあったわが国の漢詩読解の中で生じた誤訓誤読或いは異同の諸説も、この平仄式を始めとする諸法則をきちんと適用することによって一挙に解決する方途が確立出来たと断言するものである。

（注）

1．詩語として頻用されるいくつかの漢字には、平・仄両読を持つものがある。肝要なことは、その時の声調の決定は基本平仄式に適うかどうかが優先するということである。

看 kān・kàn、思 sī・sì、過 guō・guò、相 xiāng・xiàng、聴 tīng・tìng、高 gāo・gào、令 līng・lìng、郷 xiāng・xiàng、為 wēi・wèi、称 chēng・chèng それに遣 yí・wèi、降 xiáng・jiàng、耐 nēng・nài などである。

漱石詩の平仄式を点検していて気付かされた一つに「庭 tíng・tìng」がある。これまで杜甫の「登岳陽楼」の初句「昔聞洞庭水」を＜●○●○●＞と見て、これは＜平ー仄＞型の特殊型

<○○●○●>と考えていた。しかし、漱石が「庭 tìng」と読んでいたことが分かり、調べると「洞 tōng」もあって、次のように適正化すべきかと考え直している。

昔聞洞庭水　●○○●●　<平ー仄>型

今上岳陽楼　○●●○◎　<仄ー平>型　1・2句1字目を逆にした二句にわたる「救拯」。

2．

字源解説の『大漢和辞典』	語源解説の『漢字源』
〔冷〕	
〔解字〕なし。〔説文〕冷寒也、从仌令声。 ①ひややか。　②ひやす。　③きよい。 ④以下省略	〔解字〕会意兼形声。 音レイには清く澄みきって冷たい意を含む。 冷は「冫（こおり）＋音符令」氷のように澄みきってつめたいこと。 ①（動）ひえる、ひやす　②（形）ひややか、つめたい。　③すずしい。　④⑤省略。
〔冷〕	
〔解字〕なし。 ①さとす。　②さとる。　③ふる。　④物のさま。以下略。 〔泠泠〕①水の音の形容。②あまだれの音の形容。③風の音の形容。④音声の盛んなさま。⑤清らかに涼しいさま。⑥心中の清いさま。	〔解字〕会意兼形声。 「水＋音符令レイ（すみきった）」 ①（形）きよい。　②（動）さとす。おしえる。　③さとる。　④⑤略。　⑥〔泠泠〕とは、水の流れる音の形容。また、風や琴などのさわやかな音の形容。

両者の違いは字形重視の解説か（前者）、字音重視の解説か（後者）にある。例えば、後者の字音による基本義解説の一貫性に較べ、前者の〔冷〕字の解説と〔泠泠〕の解説には何の関連性もみられない。

3．漢詩漢文は古漢語ないし中古漢語の書面言語で表現されている。従ってそれらを読み解くには古漢語に繋がる現代漢語の語音・語義・語法の三分野を踏まえ、押韻・平仄その他の韻律規則や語構造を判断できる漢語力を持つ必要がある。

漢字を恣意的に並べ押韻の辻褄を合わせるぐらいでは決して漢詩とは言えないのである。

4．唐詩解説上、疑義や異同の説が生じた時、ことに近体詩作品の場合は、次の三つの観点からの追究によって限りなく正解に近付くことができる。

（1）平仄式及び平仄関連の諸規則に照らして点検する（語音面）。

（2）（1）から導き出される字音と字義（語源）との整合性を求める（語義面）。

（3）詩語の品詞および一句の語構造を確認する（語法面）。　〔2008．1．2　擱筆〕